山口県立大学 国際文化学部　教育・研究・創作

PBL を活かした活動の計画と成果

研究室のドアをノックしたら

～国際的視野に立ち　地域での課題発見・解決を目指して～

ごあいさつ

国際文化学部長　水谷 由美子

山口県立大学国際文化学部国際文化学科は 1994 年に創設され、後に国際文化学科と文化創造学科の 2 学科構成となりました。現在、国際文化学科には英語コースと国際文化コース、文化創造学科には日本文化コースとデザイン創造コースがあります。いずれの学科、コースでも長年、大学のみならず地域を学びの場として位置付け、地域の関係機関の皆様にご協力あるいはご指導を頂きながら、地域の課題発見・解決を目指してきました。また、いわゆる課題解決型教育を創設当初からカリキュラムの中に導入し、実践してきました。

最近では小学校から大学にいたるまでアクティブラーニングが実践されつつあり、その一環として問題解決型学習（PBL＝Project Based Learning or Problem Based Learning）の教育が推進されています。この学習法はアメリカのジョン・デューイの思想である「なすことによって学ぶ　Learning by Doing」という教育理念を源流としています。

本学部は 26 年間に山口県の各地をフィールドとして、学生に地域との共創や課題解決の機会を提供し、行政、企業、地域コミュニティと共に、成果を上げてきました。これらの学習を通じて、学生は調査能力、洞察力、コミュニケーション力、そして判断力を身につけ、社会に出た彼ら彼女らの行動力は地域の人々や就職先からも評価を頂いています。

行動力を磨くためには学内における講義やゼミナールにおいて習得する豊かな知識や教養も重要です。また、国際的な視野に立ち地域の課題を発見・解決するために短期・長期の留学体験も大切と考え、海外で学ぶ機会を提供しています。

本冊子は各研究室のドアをノックして、それぞれの教員あるいは学生が取り組んできたプロジェクトの成果や今後の計画などを紹介してもらい、まとめたものです。そこからは教員のアカデミックな研究や創作活動、さらに学生たちの活躍が見えてくるはずです。国際文化学部の研究・創作活動と PBL を活かした教育への理解の一助としていただきたく、本冊子を作成しました。ご高覧頂けましたら幸いです。

目 次

国際文化学科

井竿 富雄 林 炫情	（比較政治 研究室） （韓国語学 研究室）	Person Based Learning…？ 「インターローカル人材育成」のための PBL 型教育プログラム	p 3
岩野 雅子 ウィルソン・エィミー	（異文化交流論 研究室） （アメリカ社会論 研究室）	地域社会で自分の可能性を伸ばす 海外大学とつないで、「国内留学」からの国際交流も	p 4
川口 喜治 金 恵媛	（中国文学 研究室） （韓国社会論 研究室）	「座学」なくして PBL なし！ 「今、ここ」で出来ることから行動しましょう	p 5
進藤 優子 鈴木 隆泰	（国際経済論 研究室） （アジア文化論 研究室）	経済学を学んでフィールドへ satyam eva jayate（真実は必ず勝利する）	p 6
スワンソン・マーク 田中 菜採	（実践英語 研究室） （英語科教育法 研究室）	English and Critical Thinking Skills Can Unlock the Door to Your Bright Future! 高大連携で英語教育の実践力を高めましょう！	p 7
西田 光一 西脇 靖洋	（英語学 研究室） （国際関係論 研究室）	英語学習の秘訣は、よその釜の飯を食え。 やまぐち・フィンランド・クリスマスマーケット	p 8
吉永 敦征 吉本 秀子	（情報倫理 研究室） （情報メディア論 研究室）	背景理解を深めてコミュニケーションを 一冊の本を輪読し、発表する	p 9

文化創造学科

畔津 忠博 池田 史子	（視覚情報 研究室） （日本語学 研究室）	情報処理のいくつかの応用 ジグソー法によって「山口方言みくじ」を作成	p 10
稲田 秀雄 加藤 禎行	（日本芸能論 研究室） （日本文学 研究室）	あなたの知らない古典芸能の世界を探究してみよう。 やまぐちにゆかりのある文学者についての調査・研究	p 11
倉田 研治 小橋 圭介	（メディアデザイン 研究室） （グラフィックデザイン研究室）	地域をフィールドとしたメディア表現の取り組み 視覚伝達の可能性	p 12
斉藤 理 菱岡 憲司	（地域文化創造論 研究室） （日本文化論 研究室）	人の行動論的アプローチから新たな PBL 手法を試みる くずし字教室の開催	p 13
古別府 ひづる 松尾 量子	（日本語教育 研究室） （ファッションデザイン研究室）	外国人技能実習生のための日本語教科書作成 地域の文化や産業資源への理解を深める	p 14
水谷 由美子 安光 裕子	（企画デザイン 研究室） （図書館情報学 研究室）	地域資源を活かした服飾デザインで地域の課題解決にチャレンジ！ 図書館だ〜い好き！！が集う場 ― 地域とともに成長 ―	p 15
山口 光 吉岡 一志	（プロダクトデザイン研究室） （教育社会学 研究室）	伝統と革新の調和を目指したプロダクトデザイン 「怪談」を語る人々の意識の変化に迫る	p 16
渡辺 滋	（日本史 研究室）	史料現物に即した研究	p 17

井竿　富雄

比較政治 研究室

専門領域・自己アピール

政治学・政治史が主要なテーマと自称しています。政治学というのはいろんな領域にまぎれこんでいろんなことを言う人がいる領域です。私は歴史の分野にまぎれこみ、もっともらしいことを話したり書いたりしています。往々にしてそれは自分も自信がないことだったりします。

Person Based Learning…？

ここ数年、地域実習科目として台湾に行っていました。私の担当以前は、山口に縁の深い著名な学者國分直一の文書整理から始まったものだそうです。防府に台湾の偉大な画家陳澄波の幻の名作があったことから話が拡大しました。ただ、ここからはどうしたらよいものか多少途方にくれています。歴史の話も面白いし現代台湾も元気がよくて大変愉快です。ただ、行く前にかなりしっかり語学も含めて勉強していただくことが必要です。そうすると、現地に行ったとき、いろんなことで道が開けます。「調査なくして発言権なし」（毛沢東）。ブーメランで自分に還りますが。

台湾大学校史館にて

林　炫情

韓国語学 研究室

専門領域・自己アピール

日本語学と韓国語学を専門としており、対照言語学及び社会言語学の観点から日韓両言語の共通点と相違点を研究しています。研究室のモットーは実践的な「語学力」を生かした「行動」と「創造」。持続可能な学びを目指して「どのように学ぶかを学ぶ」に、ゼミ生とともに日々奮闘中です。

「インターローカル人材育成」のための PBL 型教育プログラム

「インターローカル人材」とは、地元の課題を新たな視点で再発見し、海外の地方の事例を参考にして解決したり、地域の資源を生かして双方の活性化を促したりする人材を指します。具体的な教育活動としては、2014 年度、2015 年度に「地域活性化」をテーマに掲げた、PBL 型・海外フィールドワークを韓国・昌原（チャンウォン）市で実施すると共に、地域の再生と成長のための幸せな地域社会作りセミナーを日韓大学生共同で開催しました。また、2017 年度には「地域のアウトバウンド（Outbound）観光拡大」の観点から地域が抱えている課題とその具体的な解決策を創り出すことを目指したフィールドワークを韓国・慶尚南道各地で実施し、その成果を読売旅行と JTB に企画・提案すると共に、テーマ性のある旅行商品の開発につなげることができました。

日韓大学生の地域社会連携活動セミナー

岩野 雅子

異文化交流論 研究室

専門領域・自己アピール

日本国際文化学会の活動を通して全国のさまざまな国際文化関連学部で活躍している先生方と情報交換をし、教育や研究を進めています。国内外で学生と行ったフィールドワーク報告書は、ホームページに掲載中。今は英語力と専門的内容を同時に育てる CLIL 教育法の研究や、地域の国際化・多文化共生に関する研究に取り組んでいます。

地域社会で自分の可能性を伸ばす

大学生コンテスト、キャンパスベンチャーグランプリ、論文コンテストなどを選んで、個人であるいはチームを組んで出場しています。2018 年には社会人基礎力グランプリ（中国・四国地区大会）「奨励賞」を受賞し、2019 年には大学生観光まちづくりコンテスト（訪日インバウンドステージ）でポスタープレゼンテーション 30 校に選ばれました。また、長門市でのニューツーリズム・プランの作成や、宇部市の彫刻ウォーキングツアーのルート作成などを行い、地域で報告しています。他大学の学生とも競い合い、地域の専門家から助言を受けたりしながら、調査･分析･表現･発表力などを伸ばします。

東京大会で発表

ウィルソン・エィミー

アメリカ社会論 研究室

専門領域・自己アピール

大学卒業後に来日し、ALT として山口県に住み始めました。英語科目や、異文化理解、アメリカ社会論の科目を担当しています。

研究領域として、アメリカと日本の高齢者の生きがいや子供の価値観形成について研究し、近年は学生とともにハワイにスタディーツアーに出向き、アクティブエイジングや多文化共存について研究しています。

海外大学とつないで、「国内留学」からの国際交流も

英語科目では､英字新聞やオンライン講演(TED)などを利用し、できるだけ生きた英語の学習を目指しています。ディベートの授業でも、時事問題を取り上げて、学生が生活の中で出会う課題について、多方面から考える力を身につける機会を増やしています。

更に、近年は COIL(Coordinated Online International Learning: 国際遠隔交流学習 ）を採り入れて、「欧米社会論」の授業で米国の短期大学の学生と繋ぎ、6 週間の交流プロジェクトを実施しました。学生の評価は大変高く、「今後アメリカに行きたい」とか「留学に行きたくなりました」だけではなく、海外大学の教育法や、外国人の異文化理解に関する気づきが多くありました。

今後も多くの COIL プロジェクトを実行します。

日米学生共同作成のプレゼンテーション

川口　喜治

中国文学 研究室

専門領域・自己アピール

現代中国語と中国文学を担当しています。専門分野は中国の古典文学です。なかでも杜甫や李白で有名な唐代の漢詩を研究しています。書物や文献を通して古人との対話を試みていますが、なかなか上手くいきません。gifted、天賦の才能が「無い」ことを自覚していますので、ひたすら勤勉に研究を続けるしかないと考えています。

「座学」なくして PBL なし！

PBL（課題解決型学習）は、課題を自ら発見し、検討・考察し、解決策を提案･実施する学習という意味らしいです。この学習は、学外や地域に出なければ行えないわけではありません。大学での学習や研究は、室内の「座学」であれ、屋外であれ、課題を自分自身で発見し、自分自身で解決するものなのです。私のゼミの卒業研究にも、１年間の中国留学の経験を基に、日本と中国の書道、茶道、健康などについて課題を発見し、文献調査によって、その解決方法を提案したものがありました。もちろん屋外型の研究もあり、中国農村地域の貧困と留守児童について、中国と日本の NGO における臨地調査に基づいて、「中国版子ども食堂」の提案をしたものでした。しかしこれも、ただフィールドで調査しただけでは結論には達しません。「座学」において調査を整理・検討してこそ解決策が導き出されたのです！つまり「座学」においてものごとをしっかりと考えることが、PBL のかなめなのです。

金　恵媛

韓国社会論 研究室

専門領域・自己アピール

主な関心領域は老年社会学です。最近は、人口高齢化が急速に進展しているアジアの国・地域の世代間関係や長寿文化に関する比較考察をしています。世代像や役割期待のみならず、異なる文化背景を持つ個人間の関係の在り方に注目しています。

授業では韓国語、韓国社会・文化、アジア社会に関連する科目を担当しています。

「今、ここ」で出来ることから行動しましょう

山口県は韓国から最も近く、長い交流の歴史を物語る地域ストーリーがたくさん残っています。韓国社会論研究室では、そのような地域資源と韓国（語）学習をつなぐ様々な活動に取り組んできました。例えば、下関では在日コリアンコミュニティを歩き、仙崎（港）では引揚げ現場を歩き、体験者の語りを聴くフォーラムを開催しました。山口市では百済からの「琳聖太子」伝説ゆかりの地を巡る観光マップを作り、公州の方との交流イベントで活用しました。まさに、山口ならではの学びの連携活動であると考えます。

これらの活動は、地域の方と学生と卒業生とがともに学ぶ「やまぐち韓国研究会」と韓国社会論研究室の共同で実施しています。参加者の年齢や立場、興味関心が様々なので、チームワークでは相互のコミュニケーション能力が問われるようなことも多々あります。しかし、活動からの学びや充実感は計り知れないものがあります。今後も続けたいと考えていますので、よかったらどうぞ。

進藤　優子

国際経済論 研究室

専門領域・自己アピール

専門は日本や開発途上国における教育政策が経済成長に与える影響に関する理論およびシミュレーション分析です。開発途上国での実務経験に基づいて、実践的な研究を心掛けています。本研究室では、経済学の基本的な考え方を理解し、フィールドでの経験に基づいて、研究を行うことを目指しています。

経済学を学んでフィールドへ

NPO 法人シャンティ山口が支援しているタイ山岳少数民族の村でフィールドワーク、山東省にあるユニクロやイオンなどの日系企業の調査、山口県の特産品である小野茶を海外向けて発信など様々なプロジェクトを実施してきました。2017 年度卒業生はキャンパスの放置自転車を減少させるため、YPU ドリーム・アドベンチャー・プロジェクトに採択され、撤去予定の自転車を修理しレンタルを行ったり、ポスターを制作しその効果を測定したりしました。2018 年度卒業生は「明治 150 年プロジェクト若者『志』ミーティング」に参加し、RESAS（地域経済分析システム）を用いて調査を行い、インバウンド振興のために SNS を開設し、各種メディアに取り上げられました。

知事に対してプレゼンの様子

鈴木　隆泰

アジア文化論 研究室

専門領域・自己アピール

専門領域はインド哲学／仏教学／宗教学。立脚する手法は文献学（文字資料・文献資料を用いた人間研究・文化研究）です。サンスクリット文献のみならず、チベット訳・漢訳文献を用いての〈異訳対照研究〉によって、インドにおける大乗仏教経典の成立史・思想史の解明を目指します。

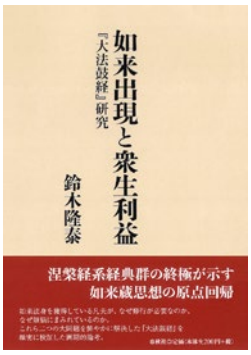
satyam eva jayate（真実は必ず勝利する）

①涅槃経系経典群の研究。主要な文献は、『大法鼓経』『大雲経』『央掘魔羅経』『涅槃経』『法華経』。使用言語は、サンスクリット、仏教サンスクリット、チベット語、漢語です。

②仏教を一つの文化体系と捉えた上で、「教義と儀礼」の関係を中心に、インド仏教（特にインド大乗仏教）の実像に迫ります。主要な文献は『金光明経』で、使用言語は①と同じです。

③仏教を「自分の問題」として受けとめ、「今、ここにいる自分に通じるメッセージ」を仏典から読み解きます。主要な文献は、南伝上座仏教が伝える仏典。使用言語はパーリ語です。

http://suzuki.ypu.jp/



2020 年 2 月に刊行された近著

スワンソン・マーク

実践英語 研究室

専門領域・自己アピール

専門領域は第二言語教育です。その他、様々な研究トピックに携わってきましたが、主たる研究トピックは英語教育、教師の能力開発、クリティカル・シンキングです。私の教育の目標は大学生の英語力を高めるとともに、国際的視野を広げさせ、今日のグローバル社会に活躍できるように指導することです。

English and Critical Thinking Skills Can Unlock the Door to Your Bright Future!

グローバル化社会において活躍するためには異文化理解能力とクリティカル・シンキングが欠かせないスキルとなります。今日のような情報過多の時代において、いわゆるフェイクニュースなどに惑わされず、的確に状況を判断するためにはクリティカル・シンキング・スキルが最も重要になってきます。

スワンソンゼミでは、物事を客観的に、批判的に考える能力の向上を目指します。ゼミ生には、複数の認知バイアス（Cognitive Bias）と論理的誤謬（Logical Fallacy）などを含め、国や地域の文化・価値観・視点の違いを認識することを勧めています。様々なバイアスの存在に気付くことは、固定観念、偏見などに振り回されないための大事な一歩です。

山口に来る前は、接客英会話の便利帳の出版や中京警察署での接客英語の講座の担当など京都の皆さんと様々な地域活動をしました。山口の皆さんとも様々な地域活動をしていきたいと考えています。

田中　菜採

英語科教育法 研究室

専門領域・自己アピール

日本人英語学習者の英語リーディングについて主に研究しています。例えば音読や速読などの読解方法が言語習得にどのように役立つのか、理論的な裏づけや科学的な根拠があるのかを調べて、より効果的な外国語学習へと発展させることを目指しています。研究室では、小学校英語教育や World Englishes など英語教育に関連する様々なトピックを扱っています。

高大連携で英語教育の実践力を高めましょう！

私の担当している英語科教育法の授業では、中学校・高校の英語の教師を目指す大学生が英語教育の理論や実践的な教授法を学んでいます。

この授業では、山口県立華陵高等学校と連携しています。大学生が華陵高校の授業を参観したり、華陵高校で模擬授業を行います。また、華陵高校の先生に大学で直接指導していただくこともあります。これらを通して、これまで生徒として受けていた授業が緻密に練られた目標や段階で成り立っていることを、教師側の視点で実践的に学んでいきます。大学の一般的な講義の授業とは違って、学生自身が高校生の前で授業をするので、緊張や責任も伴いますが、4年次の教育実習に向けて貴重な経験となっています。

さらに、華陵高校の高校生との交流会では、山口県立大学での学びを高校生に伝えたり、大学に関する疑問に答えたりしています。今後も高校生にとっても大学生にとっても有意義な交流としていきたいです。

西田　光一

英語学 研究室

専門領域・自己アピール

専門は、理論言語学、英文法、日英語対照研究、特に指示と照応に関わる表現の語用論的研究。日本語用論学会をはじめ、関連の全国規模の学会の運営に多く関与。海外の国際学会にも成果発表の場を広げている。近年は狭義の文法の分析に加え、失言の要因や広告の表現効果の解明など、従来の研究で未着手だった問題に取り組む。

英語学習の秘訣は、よその釜の飯を食え。

英語は頻度や理解度の違いが地域間で大きいとはいえ、世界中で使われています。そのため、英語の研究は、方法や分野が多様で、ライバルも多いです。新理論が常に現れ、競争が激しく、長年、研究してきても、その経験が活かされるというより、新しいアイデアをどう次の研究につなげるかという生産力が問われる世界です。これは、歴史的に、英語が他の言語の特徴を多く取り入れつつ、もとの特徴の多くを捨てた結果、今の英語らしさに至っていることと深い関係があります。英語の勉強では、最初から自分のオリジナルを追求するのではなく、多くの他者と接して自分ができることを見つけるというアプローチが大事です。英語を勉強している人は、日本中、世界中にいるので、自分と同じ関心の人に遭遇するチャンスはおおいにあります。学外のスピーチコンテスト、合同研究会、他大学の大学院進学など、よその釜の飯を食って英語の語学力を広げ深める機会を提供します。

西脇　靖洋

国際関係論 研究室

専門領域・自己アピール

国際関係論を専攻し、南欧を中心とした欧州諸国の政治外交について研究しています。理論と実証の双方の側面から世界政治のさまざまな問題について考察し、この学問の楽しさを伝えたいと考えています。

※2020 年 3 月退職

やまぐち・フィンランド・クリスマスマーケット

山口市、山口商工会議所との提携のもと、毎年 12 月中旬の土日に「やまぐち・フィンランド・クリスマスマーケット」を開催します。国際文化学部開講科目「グローバル・プロジェクト」または国際文化学科開講科目「地域実習」を履修した学生は、同イベントに参画し、地元企業との連係のもと、商品やサービスに関する新たなアイディアの提供や企業の国際化への協力等を実施します。

（例 1）金光酒造とのコラボレーションによるクリスマス限定「山頭火」の販売

（例 2）御堀堂とのコラボレーションによるワークショップの開催。

（例 3）大内人形の木地を用いたクリスマス人形制作ワークショップの開催

イベントポスター

吉永　敦征

情報倫理 研究室

専門領域・自己アピール

世界を理解するには、ものごとの原因や理由、推論の形式などを把握することが大切です。もちろん世界の中には他者や他文化というものが入っています。

この研究室では、過去の哲学や倫理学のテキストを丁寧に読むことで、理解し把握する能力を向上させます。とても地味な能力ですが、人生のさまざまな局面で自分を助けてくれることになります。

背景理解を深めてコミュニケーションを

私がこの研究室で学んだのは、背景知識を探求するスタンスです。私は３年次から犯罪に関しての書籍を中心に読み進めてきました。犯罪の原因は表面的な情報だけで判断はできません。その本質の理解のためには犯罪に及ぶまでの経緯、育ってきた家庭環境など一人ひとりの異なる事情を知ることが大切だという心構えが、研究室での勉強から身につきました。

私は就職先が自分の所属した学科と関連の薄い分野ということもあり、自分で学ばなければならないことが多くありましたが、情報倫理研究室で学習した論理的な思考方法を活用し、自分で問題意識を持ち、その解決に必要とされる知識を学ぶノウハウが身につきました。

論理的思考はこれまでの物事の見方を変えることから、幅広い場面で用いることのできる汎用性の高いスキルです。物事の本質を考えるようになれば他者に対して寛容なマインドを持つ余裕も生まれ、自分の人生も豊かになります。

吉本　秀子

情報メディア論 研究室

専門領域・自己アピール

アメリカ合衆国のパブリック・ディプロマシー（メディア等を使った広報政策を重視した外交）について研究しています。主要著書『米国の沖縄占領と情報政策：軍事主義の矛盾とカモフラージュ』、“U.S. Occupation of Okinawa: A Soft Power Theory Approach.”

一冊の本を輪読し、発表する

2018年度はテッサ･モーリス＝スズキ著『過去は死なない』を３年のゼミで輪読しました。戦争の記憶すなわち集合的記憶がなぜ国によって異なるのか。このような集合的記憶が集団によって異なる原因を作るマスメディアの役割などを議論しました。また、その成果を下関市立大学との合同ゼミで発表し、国際関係論、国際経済学を専攻する他大学の学生と意見交換しました。

2019年度は、東京大学における講義録『人間の安全保障と平和構築』を輪読し、人の移動と国際支援、文化、教育、メディアなどの関わりを考えました。これらの議論でふまえた成果をもとにゼミ生たちは４年生になって卒業論文（または卒業プロジェクト）を書きます。

卒論が終わって湯田温泉で打ち上げ

畔津　忠博

視覚情報 研究室

専門領域・自己アピール

画像や音声といった身近な信号に対して、コンピュータを用いた信号処理を行うことを主な研究テーマにしています。例えば、取得した信号に対して雑音を除去したり、目的に合わせて強調処理をしたりといった内容です。最近は、人間の視覚特性を考慮した画像強調に取り組んでいます。

情報処理のいくつかの応用

人間の視覚特性を考慮した画像強調を行うときは、色の基本属性である色相、彩度、明度や、それぞれの関係性に注目する必要があります。また、色を表現する色空間にはさまざまなものがあり、それぞれの空間において色相、彩度、明度の定義が異なります。そのため、研究では、より自然な画像強調が行えるような色空間の選定や、その色空間を利用する際に生じる表示可能な色の範囲（色域）の問題を適切に処理できるような方法の検討を行っています。これらの応用として、明度や彩度が十分でない画像に対する高品質な強調処理や、さまざまな環境における見やすい画像の作成などが期待できます。また、データ分析にも興味があり、アンケート調査や学習活動などで得られたデータに対して統計的な分析を行っています。

池田　史子

日本語学 研究室

専門領域・自己アピール

共通語のアクセント規則では、撥音・促音・長音などに下がり目が位置することはありませんが、伝統的な山口方言では、そのような特殊拍にもアクセントの下がり目が位置することを明らかにしました。また、アクティブ・ラーニングの方法を用いた日本語ライティング授業や、ピア・サポートによるライティング支援についての研究も行っています。

ジグソー法によって「山口方言みくじ」を作成

多様な知識を持ち寄り、ジグソー・パズルのように組み合わせて思考の転換を促すことで、新たな知識を再構成する「ジグソー法」を用いています。まず、グループに分かれて、「おみくじの起源や変遷」・「方言の活用」・「山口のことば」・「おみくじのデザイン」について情報を収集し理解を深めます。その後、多様な知識を持つメンバーを組み合わせて、「山口方言みくじ」を創作しました。

かつての日本では、地域によっては、「方言」に対してコンプレックスを持つことがありました。しかし、現代では、地元のことばを誇らしく受けとめて、楽しく活用するようになっています。このおみくじが、山口方言について知り、親しむきっかけになることを願っております。

知識を再構成するジグソー法

稲田　秀雄

日本芸能論 研究室

専門領域・自己アピール

私の専門領域は、日本古典芸能（特に能・狂言）、日本中世文学（『平家物語』など）です。能・狂言は「能楽」として、ユネスコの無形文化遺産にも登録されています。当研究室ではそうした能・狂言の特質や魅力、そしてその背景となる日本中世の文学の世界を皆さんといっしょに探究しています。

あなたの知らない古典芸能の世界を探究してみよう。

山口市には、プロの流儀としては廃絶した鷺流（さぎりゅう）の狂言が、山口県指定無形文化財として伝承されています。私は、能・狂言の研究者として、山口鷺流狂言保存会顧問というかたちで、この貴重な山口鷺流狂言の伝承活動をこれまで支援してきました。具体的には、毎年の定期公演の際のパンフレット（曲目解説）執筆や当日の解説、復活上演する演目についての助言を行ったりしています。2015 年 2 月には、山口県立大学が学術提携をしている米国のセンター大学にて、本学学生の参加のもとに、山口鷺流狂言の初の海外公演が実現しました。なお、毎年の定期公演では、これまで当研究室所属の学生の皆さんにお手伝い等お願いしてきましたが、このほど「山口県立大学芸能サークル『結-yui-』」が発足することになりました。私が顧問を務めますので（2023年3月まで）、参加をおすすめします。皆さんにとって未知なる古典芸能の世界にぜひ触れてみてください。

加藤　禎行

日本文学 研究室

専門領域・自己アピール

近代（明治以降）の日本文学における小説表現をおもな研究領域として、調査・研究に従事している。また明治期の出版物（図書・雑誌等）についての書誌学的な研究も行っている。山口県立大学では郷土文学資料センター研究員も兼任しており、やまぐちにゆかりのある文学者についての地域向けの講座・展示などにも取り組んでいる。

やまぐちにゆかりのある文学者についての調査・研究

山口県立山口図書館に設けられた「ふるさと山口文学ギャラリー」という展示スペースで、2 年に 1 回、学生と一緒に郷土文学資料展示を作成しています。2020 年度には展示「宇野千代と〈やまぐち〉」（仮）を予定しています。他にこれまで同スペースでは、「国木田独歩と〈やまぐち〉」（2018 年度）、「山口県立大学郷土文学資料センターのあゆみ」（2016 年度）、「嘉村礒多が残したもの」（2015 年度）、「『新潮』編集者、楢崎勤の文学活動」（2013 年度）他の展示を、文化創造学科の実習科目として作成してきました。今後もこうした地域の文学についての調査・研究を踏まえた情報発信を継続していきたいと考えています。

「国木田独歩と〈やまぐち〉」（2018 年度）

倉田　研治

メディアデザイン 研究室

専門領域・自己アピール

デザインやアート思考のアプローチから、現代的なテクノロジーや表現の視点を用いて、新たな価値形成の創出を試みています。地域資源と写真・映像表現、GIS（地理情報システム）を結びつけた横断的な表現活動や文化利用を探求しています。地域の人たちとかかわり、学生とともに学びながら研究創作を進めています。

地域をフィールドとした
メディア表現の取り組み

山口市：山口アーツ＆クラフツの運営や出展する授業を展開しています。イベント運営の流れやワークショップ補助の体験と、自分たちでワークショップ実施や出展を企画運営するプロジェクトを実施しています。関連する授業では、スカーフをデザインからPRまで企画立案し、商品化もされています。

防府市：景観ワークショップなどを実施し、地域資源の魅力を Web 上で発信・アーカイブしています。野島では、学生目線で魅力を写真撮影して、マップにまとめた「のしマップ」を作成、ポスターと Web サイトによる発信をしています。

宇部市：厚南校区まちづくりサークルに参画し、写真と GIS を活用したワークショップ実施や防災マップ作成に協力しています。

山口アーツ＆クラフツ 2019 出展の様子

小橋　圭介

グラフィックデザイン 研究室

専門領域・自己アピール

グラフィックデザインとは、主に平面上に表示される文字や画像、色彩などを使用して、情報やメッセージを伝達するデザイン領域を指す。本研究室では、地域の企業や団体と連携し、チラシ・ポスター・サイン・パッケージなど様々な媒体制作を通して、社会における視覚伝達の可能性を探求している。

視覚伝達の可能性

山口市：地域密着型銀行の創立記念事業に伴い、「通帳デザイン」のリニューアルを担当しました。学生によるデザインコンペ形式を採用し制作過程も含めてイベント化することで、広報活動を積極的に行いました。

萩市：同市企業組合からの依頼で、農産物を用いた加工品のシンボルマークやパッケージデザイン、販売時に活用するのぼりや法被など制作物一連に関する「ブランディング」を担当しました。

防府市：新施設の建設に伴い、施設説明のための広報媒体（パンフレット）制作を依頼されました。現地視察や担当者との打ち合わせを繰り返し、約半年のプロジェクトを実施しました。

通帳デザインリニューアル

斉藤　理

地域文化創造論 研究室

専門領域・自己アピール

日欧の文化遺産分析を中心に、歴史的建造物を活用した観光まちづくりや、地域文化を支えるコミュニティ・サービスラーニングの実践的研究等を進めています。近年は国際文化学（文化間の接触で生まれるダイナミクスに着目する学び）を基盤に、地域社会の文化的ポテンシャルを向上させる試みを様々な自治体と共に取組んでいます。

人の行動論的アプローチから新たな PBL 手法を試みる

私の研究室では、グローバル時代に対応し、世界のどこでも実践できる地域文化調査法の開発を進めています。とくに地域社会における人々の行動に着目した独自の VERM（The Verbs Extracting Research Method）を各地で試行。これをベースに PBL も進めています。

例えば、山口県柳井市では、豪商が建ち並ぶ地域をつぶさにフィールド調査し、およそ 200 年前の献立を発見。これを忠実に再現し歴史的街区で提供するプロジェクトを展開しました。かつての「動詞」 を現代に蘇らせる試みです。

こうした PBL に取り組んだ結果、大学生による全国観光アイディアコンペ（公益財団法人日本観光振興協会主催）において 2 年連続で入賞（全国 1 位 /2 位）するなど具体的な教育上の効果がもたらされています。

プロデュースされた歴食 [二百年御膳]

菱岡　憲司

日本文化論 研究室

専門領域・自己アピール

私は日本文化論、なかでも日本近世文学（江戸時代の文学）を専門としています。日本文化論研究室では、くずし字を読み、和本をはじめとした江戸時代の一次資料を取り扱うなど、文献学的な研究手法を身につけることを重視しています。日本古典文学を、世界の文化・文学のなかで相対的に論じていく姿勢を養っていきたいと思います。

くずし字教室の開催

日本文化論研究室では、年間を通じて週 1 回、自主ゼミを開催しています。自主ゼミでは、江戸時代の板本をあつかい、くずし字読解能力を身につけます。そして、夏休みに小学生対象の「こどもくずし字教室」を開催し、地域へ学習成果の還元を行っています。

「こどもくずし字教室 2019」

古別府　ひづる
日本語教育 研究室

専門領域・自己アピール

日本語教員養成担当。日本語教師と日本語アシスタントの資質について研究しています。現在は、英語圏中等教育機関の日本語アシスタントの資質調査に一区切りつけ、ASEAN 諸国、特にタイの中等教育機関の日本語アシスタントの資質調査を進めています。

外国人技能実習生のための日本語教科書作成

外国人労働者受け入れ拡大の中で、約半数が技能実習生だと想定されています。一方で、実習生の待遇が問題視されており、受け入れ体制の構築や相互理解を進める取り組みが必須です。

「日本語教育実践演習」（PBL）では、卒業生が卒論で実習生の生活面の問題点として抽出した 4 因子に基づき日本語教科書を作成し、渡日前･直後教育への汎用を試みています。

現在、4 因子（決まりの厳しさ、日本人の細やかさ、物価の高さ、生活の多様さ）を教科書の骨組み（章立て）として本文を受講生が作成し、内容の難度や適切性に関し、実習生がいる研修所でインタビューを行い、修正を終えた段階です。

技能実習生にインタビューする受講生達

松尾　量子
ファッションデザイン 研究室

専門領域・自己アピール

地域・生活・文化をキーワードとして、服飾やテキスタイルを中心に研究創作活動を行っています。2019 年度は、地域の文化資源に関わる研究活動として、着用体験を目的とした大礼服の復元制作を行いました。服飾研究の立場から、地域の文化創造に貢献することを目指しています。

地域の文化や産業資源への理解を深める

2017 年度より、地域の文化や産業資源への理解を深めるため、柳井市の伝統織物である「柳井縞」をテーマとしたプログラムを行っています。「やない西蔵」を訪問し、柳井縞の織り体験を通して、染織工芸における手仕事の意味や意義を学び、現代の生活空間に即した柳井縞の活用に取り組み、手織りの柳井縞を用いた生活雑貨の提案などを行います。2019 年度は、「柳井縞の会 25 年の歩み」展において、パネル発表を行いました。

2019 年度は、新たに、企業との PBL にも取り組みました。周南市に本社を置くサマンサジャパン株式会社との PBL では、HP のデザインに関り、サマンサジャパン株式会社のスタッフ・ユニフォームの魅力を伝えるため、イラストと写真を組み合わせたページのデザインを提案しました。HP のサマンサブランドのページに「ユニフォーム紹介」としてアップされています。

水谷　由美子

企画デザイン 研究室

専門領域・自己アピール

地域資源を活用する服飾デザインを通じて、伝統工芸や産業の社会的、文化的価値の創造を目指す。ラップランド大学、ハワイ大学マウイカレッジとサービスデザインを適用するワークショップを通じた共同研究を継続中。2020 年度は海洋環境保護の視点に立ち、デザインにおける責任と倫理について服飾美学で研究創作に挑む。

地域資源を活かした服飾デザインで地域の課題解決にチャレンジ！

山口市：大内氏とサビエルの出会った時代をテーマにクリスマスファッションショーを開始し、後にフィンランドロバニエミ市からサンタクロースが参加し、両市の交流が生まれ、観光パートナーシップ協定の礎になりました。

長門市：東後畑のブランディングを通じて、農業文化・産業振興を目指したアグリアート・フェスティバルを 7 年間実施した結果、地域の恒例行事として定着してきました。またモンペに着想を得た mompekko をヴィンテージ化して商品開発しています。

防府市：(1) 伝統工芸の工房を調査しマッピング化するとともに、異業種を繋げて野点用道具を開発しました。(2) 茜島の愛称を持つ野島でアート（茜染め）による地域活性化を継続中です。

第 25 回 棚田サミット発 mompekko tanada

安光　裕子

図書館情報学 研究室

専門領域・自己アピール

研究テーマは、①公立図書館における資料の取扱い、②子どもの読書、③学校図書館の利用促進、④司書・司書教諭の養成など、図書館全般です。山口県立山口図書館運営協議会や山口市立図書館協議会などの会長を歴任。図書館情報学という専門性を活かした、地域に存在する課題を解決すべく地域に根ざした活動を展開しています。

図書館だ〜い好き！！が集う場 ― 地域とともに成長 ―

本研究室は、宮野のキャンパスを飛び出して、地域の方々との交流を積極的に行っています。ゼミ研修旅行の一環として先進的な図書館を見学し、その成果を『西日本図書館学会山口支部報』に投稿したり、パネルにまとめて発表したりすることによって、図書館関係者や地域の方々に新しい図書館像の提案を行っています。さらに、山口市立中央図書館まつりで実施している学生の企画（「図書色見本―みんなでつくる出会いの本棚―」など）は、地域の方々が日常生活の中に図書館を活用するきっかけとなる企画になっています。

本研究室は、これからも地域の方々との交流をとおして、地域の課題を解決する一助となるなど、地域とともに成長していきたいと考えています。

学生企画の様子（山口市立中央図書館）

山口　光
プロダクトデザイン 研究室

専門領域・自己アピール

プロダクトデザインの実務経験（生活雑貨、工芸品、家具などの商品開発・マーケティング）を活かして、本学では地域振興を目的とした「地域産業デザイン」を中心に活動しています。伝統工芸から工業製品まで、山口県内の企業や自治体等との産学官連携による研究・創作活動およびブランディング等にも携わっています。

伝統と革新の調和を目指したプロダクトデザイン

地域資源を活用した産学官連携事業や研究・創作活動の中で、学生も交えての PBL も行っています。

山口市：徳地和紙と銘木を活用した団扇・KOUSA のデザインでは、学生を参画させて商品開発を行いました（作品は東京・イタリアなどの国際展示会で発表）。また、大内塗のデザイン活動を通じて、漆器の木地挽きなどの伝統技術の体験し、後継者の育成に向けた活動も行っています。

萩市：萩ガラスにおける商品企画やデザイン活動、ガラス工芸品の制作体験を行なっています（国際展示会で発表）。

その他、家具や雑貨・工業製品などの様々な企画・デザインを通じて、幅広く教育活動を展開しています。

徳地和紙と銘木の団扇 KOUSA 展示風景

吉岡　一志
教育社会学 研究室

専門領域・自己アピール

教育社会学の視点から、子どもと大人の関係性の成り立ちを解明し、子どもと大人の新しい文化を創造することを目指しています。これまで「学校の怪談」をめぐって児童・生徒と教師がいかなる関係を取り結んできたかを調査してきました。現在は大人と子どもの関係史の観点から、「怪談」の歴史的変遷に注目しています。

「怪談」を語る人々の意識の変化に迫る

中世から近世への移行過程において、妖怪などの神秘的存在への信仰は徐々に弱まっていくと言われます。現在に至ってますます、人びとは妖怪を信じなくなっていきます。しかし、確かに「感じる」はずの妖怪を存在しないものとして理解することは、相当の自己抑制を必要とします。その意味で、自己中心的な子どもは、その自己抑制がきかないために、妖怪を否定することができません。近世において、人びとが自己の衝動を制御してふるまうようになる過程で、妖怪への信仰が衰退すると同時に、自己制御が十分にできない子どもが、大人とは異なる存在として浮かび上がってくると考えられます。

この仮説を文学や日記などの過去の文献資料をもとに明らかにしていくことが現在の研究課題です。この課題は、現在において妖怪を信じない大人と信じてしまう子どもという権力関係の再構成し、新たな大人－子ども関係を創造していくために役立つと考えています。

渡辺　滋
日本史 研究室

専門領域・自己アピール

日本史を専門としています。これまで、とくに前近代の地方行政、日本漢文の形成過程、歴史史料論などを専門に研究してきました。近年では山口県の歴史などにも興味を持ち、周防国府、周防国の神社、寺内正毅などについても研究を進めています。

史料現物に即した研究

世の中、色々と聞こえの良いキャッチフレーズとか、一見すると華々しい物事というのが、あふれています。しかし現実には、本質的な価値についてきちんと検討されたうえで、そうした評価を得ているものは、それほど多くありません。大学における日本史研究では、そうした「なんとなくのイメージ」から脱して、根拠となる「史料」に基づいて、きちんと分析を進めていく姿勢が求められます。

日本史研究室では、これまでも県内各地の自治体や、全国各地の企業などと共同して、地域の歴史・文化を史料現物に即して調査・研究する活動を通じ、様々な成果を上げてきました。今後も、そうした活動を積極的に進めていく予定です。

地域の歴史文化を体験するための紙漉き

山口県立大学 国際文化学部 教育・研究・創作　PBL を活かした活動の計画と成果
研究室のドアをノックしたら 〜 国際的視野に立ち 地域での課題発見・解決を目指して 〜

編集者：水谷由美子
執筆者：国際文化学部教員
グラフィックデザイン：下川まつゑ
発行者：山口県立大学 国際文化学部　〒753-8502 山口市桜畠 3-2-1
TEL/FAX：083-928-3423　Email：kokusai-jimu@fis.ypu.jp
発行日：2020 年 3 月 31 日